

すでに熱帯の楽園を手に入れた億万長者、マルコスには病的な傾向があった。多すぎることは決して十分でないと言う事だ。マルコスは自分がロスチャイルド家、サウド家、オツペンハイマー家と同じくらい金持ちであることを万人に知って欲しかった。このことがマルコスを破滅させることになる。

マルコスは、日本人が自分を食い物にし、大きな金貯蔵所とは離れた方向へ案内していることを知った。それでも日本人の手助けなしに最良のゴールデン・リリー施設を発見し、発掘することは困難である。本物の地図があり、ベン・バルモアのような目撃者がいたとしても、場所を探し当て目印をつけてそこを掘り始めることは出来なかった。ベンはその場所へ案内することは出来ても地中の構造物については何も知らなかった。地上でさえ、ベンは正確に場所を特定できなかった。木々は倒れ、川はコースを変え、新しい建造物は場所の目印を消してしまったのだ。もし場所を数インチずらしただけで、数ヶ月が浪費されてしまう。そこで、マルコスは有名な霊能者と利口な鉱山技師を呼び寄せることを決めた。鉱山技師は地図を解析し、霊能者は金の埋蔵場所を正しく確定出来るだろう。ひとたび彼らの仕事が終われば取り除けばよい。

GOLD WARRIORS
金を市場に出すことがもうひとつの悩みの種だった。一九三三年以来、一九七四年まで一般のアメリカ人は金の購入を法律で認められていた。その結果、世界の金価格は上昇し始めた。このおかげでマルコスは、もし市場に金を持ち込めるなら、売却可能な金の大量所有者と言うすばらしく「強者の立場」につけることになる。しかし、マルコスの回

収した金の延べ棒は、サイズ、純度、重量、あるいは刻印とも標準ではなく、認定証書もついていなかった。なんでもありの闇市場の取引は別としても、通常の金の取引では、ロンドン金市場で受け入れられる標準のサイズ、重量、純度で行われるのだ。本物の金の延べ棒は純度認証刻印がつき、さらに認定証書番号がかならず必要だ。また、所有証明書も、由来証明書も必要で、輸送記録を示す文書の保証も保険も必要になる。ゴールデン・リリー作戦で略奪されたほとんど全ての財宝はロンドン標準に合致しなかった。財宝はアジア諸国由来のもので、それらの金塊は一貫性がなく、純度は22カラット以下であった。また、財宝は銀行や国庫からの正規なものではなく、海外の中国王、マレーのイスラム教徒、仏教徒の一派、麻薬王、ギャング、古代の墳墓、宝石類そして工芸品の貯蔵品に由来していた。金塊はいろいろな形や重さで印やシンボルがつけられ、違った言葉でスタンプを押されるか刻まれていた。金塊はそれぞれ指紋のように特徴のある各種の鉱物や不純物を含んでいた。試金分析をすればどこで採掘されたかが明らかとなる。第2次世界大戦の終わった後のヨーロッパで連合国は、ナチの金塊を再精錬し、所有を示す顕著な特徴や名残を消し去り問題を切り抜けた。

過去にマルコスは回収した金塊を日本人やCIAを通して売ることで、この問題を回避していた。両者とも不ぞろいだったため、ずいぶん値切られたようだ。

実際、CIAはサンタ・ロマーナが門番（案内人？）を務めた期間にマルコスが手数料を払ったように、マルコスにも発見者としての手数料を払った。

マルコスは闇市場での取引を試み、規格外の金塊をパナマに対してコ

カインと交換し、タイの麻薬王とはヘロインと交換した。しかし、それはそれで麻薬の売人を見つけなくてはならないという別の頭の痛い問題をもたらすことになる。

もしマルコスがCIAと日本人を出し抜き世界市場で自分の金塊を売ろうとするなら、ロンドンの金基準を満たすため、金塊は物質的に改変（浄化と呼ぶ過程）されねばならない。大幅値引きさえすれば、「金カルテル」のメンバーがマルコスのために金浄化をやってくれるだろう、だからマルコスは、金を浄化し、さらにその不純物混入率がフィリピン鉱山から採掘された正当な金である正当性を証明の出来る民間人（私人）を見つけなければならなかった。

ひとつの可能性がカーティスと言う名前のネヴァダに住む鉱山技師で冶金学者の男だった。マルコスがメキシコ湾のカンクンで開催された大統領会議に参加した時、マルコスはコスタリカの大統領、ホセ・フイゲレスと金塊問題について話し合った。コスタリカにも金鉱があったので、フイゲレスはその問題についてはよく知っていた。フイゲレスはマルコスに、ロバート・カーティスはすでに発掘された鉱石からより多くの金を取り出す方法を確立し、あたかもフィリピンで採掘されたかのように金塊の持つ顕著な特徴を変えることが出来ると言った。カーティスを見つけ出すため、マルコスがよく面倒をみていたウイスコンシン出身の詐欺師（ばくち打ち）、ノーマン・キルストを呼んだ。

GOLD WARRIORS
マルコスはすでに有名な霊能者、オロフ・ジョンソンと接触をしていた。かれは市民権を取得しアメリカ市民になりシカゴに住んでいた。

ジョンソンはアメリカの深海財宝ハンター、メル・フィッシャーが、一七世紀に新世界から略奪した一億四千万ドル相当の金塊を積んで沈没したスペインのガレオン船探索で沈没場所を特定する手助けをした。ジョンソンはまた宇宙飛行士とのテレパシー（精神感応）の実験をするため、アポロ計画の間、アメリカ政府に雇われていた。NASAとの仕事でジョンソンはアメリカ空軍の大佐と会い、フィリピンに行き、クラーク空軍基地で財宝埋蔵場所を調査するように依頼された。ジョンソンがクラーク基地で仕事をしている時、うわさがひろまり、ヴィラクルシス大佐がジョンソンに会いに来た。彼はジョンソンにクラーク基地での財宝探索は厳しく禁じられていると言った。しかし、ジョンソンはマルコス大統領の大きな力になれたし、基地外の財宝探索にも大きな力となったのだ。

マルコスはいつも自分を霊能者だと夢想していたのでマラカニアン宮殿で二人が会った時、マルコスはジョンソンに深く印象付けられた。マルコスは霊能者に、フィリピン人民のためにも第二次世界大戦の財宝を見つけ、そして人民を貧困から救うため、ジョンソンの助けが必要なのと言った。マルコスは隠匿された日本軍の金塊の多くの場所をすでに知っているが、彼の部下たちはどこを掘ればいいのか厳密には知らないのだと言った。

オロフ・ジョンソンは目標場所を的確に示す偉大な情報提供者になりうる。ヴィラクルシス大佐は専門家チームも投入していた、彼の言によれば、チームはレバー（Leber）グループと呼ばれた。レバーはREBEL（反逆）を逆に綴ったものだった。マルコスはオロフ・ジョンソンにレバー・グループの指導メンバーになるよう望み、謝礼は気前よく山分けにし

ようと言った。ジョンソンは大喜びし、魅了され、すぐに意見が一致した。

一方で、一九七四年後半、ロバート・カーティスはノーマン・キルストがフィリピンからなんでも電話したうちの最初の連絡を受けた。カーティスは四十四才の成功した採掘・精錬会社のオーナーで、会社はレノの近くのネヴァダ州スパークスにあった。

カーティスはサン・フランシスコで銀行員としてスタートし、カリフォルニア・ネヴァダ州境に沿った地域の古い銀や金の採掘に魅了された。彼は多くの古い採掘鉱を手に入れ、スパークスに工場を建てた。

その工場でカーティスは鉱石を再処理し、より多くの金、そしてプラチナやイリジウムなどの貴金属を採り出す新技术を完成させた。

大抵のひとは、アメリカでプラチナが採掘されるとは知らなかったが、それは金のカルテルが、アフリカで自分たちの鉱山から採掘する金属の量や価格を支配するためプラチナの探索を妨害したからだ。しかし、カーティスは独力でシエラで採掘した鉱石からプラチナを採り出す方法を確立した。そのおかげでカーティスはそこそこの金持ちになれたのだ。

GOLD WARRIORS

ノーマン・キルストはボブ・カーティスに、マニラに飛びマルコス大統領のために精錬所を立ち上げる相談をする気がないか訊ねた。キルストはカーティスに、金塊を再精錬し、認証をフィリピンの公式のナンバーと刻印に変え、フィリピンの鉱山からの採掘されたように見えるよう化学組成を変えることをマルコスが望んでいると説明した。カーティスにとって信じがたいのは告げられた金の量の多さだ。キルストとマルコスはまず第一に、少なくとも一年に三百トンの金塊、つまり三

千トンの金塊を向こう十年間で処理することを望んでいたのだ。(現在の価値なら二百八十兆円！)

カーティスはよく考えて、下調べをした。歴史的にみても、フィリピン鉱山から採掘した金が大きな割合を占める可能性はなかった。一九三九年にフィリピンの金山はそれまでの最大の量の金を産出したが、百万トロイオンスつまり三ートンをちよつとである。一九七〇年代にフィリピンは毎年わずか二トンを産出しただけだった。金鉱の作業は活気がなく非効率的だったので、毎年の産出量が突然十倍に急上昇したことを説明するのはむずかしかった。しかしながら、マルコスはもう少し辛抱すれば長年にわたった少量の市場取引から抜け出せる。金塊の浄化さえできれば、マルコスはすぐにでもそれを民間のバイヤーに売ることが出来る。

カーティスはキルストの話は何回か断ったあと、一九七五年二月二十二日、キルストから長い手紙を受け取り考えを変えた。手紙には、本当の金塊の出所は日本軍の略奪品だと明らかにしていた。クリストは手紙で述べている、「アメリカ大使館の敷地、クラーク空軍基地、スービック海軍基地に埋蔵された財宝がある。重要なものが34ヶ所で、それほど重要でない場所が一三八ヶ所ある。レバークループは百七十二ヶ所全ての回収計画を立てたが、重要な三四ヶ所での作業だけを望んだ。というのは三四ヶ所のうちのいくつから財宝を回収できただけでなく、ずいぶんいい仕事になると知ったからだ。」(マルコスはベンが自分のために、八番抗、九番抗、マンタルパンの三枚の地図を取り除いていたことを知らなかった)ので隠匿場所一七二ヶ所と言う数字が定着していた。「君が埋蔵場所へ行けば、そこで本物の日本軍の図面を

見せてもらえるだろう。」。

「一九四〇年の金相場で言えば七千七百七十億円の財宝があるんだ：坑道の内のおぼけ貯蔵所には：九千九百九十億円の財宝がある：八千八百八十億円の財宝がある：」。どんどん、財宝の数字は途方のないものになった。マルコスの取り巻きはこれらの推測を、三桁の数字と長いゼロが続く円記号で印のつけられた地図を根拠とした。地図上にある多くの他の記号のように人を欺く暗号が含まれていることを考えもせずに、その記号で埋蔵場所に七千七百七十億円の金があるという結論に飛びついた。マルコスはたいへん興奮して、自分のヨットに「七七」と名づけた。少し理性的に考えれば、各埋蔵場所にどれくらい財宝があるのか誰もわからないことは自明だ。埋蔵された個別の品目は金の仏像、宝石が詰まったドラム缶のように地図上に特定できるが、その価値は特定できるわけではない。現行の金価格がどうであろうが、七五^キの延べ棒はまともな人間であれば誰でも満足できるものだ。多くの理由のため、ほとんどの財宝ハンターたちは、地図を持つ者も持たないものも、収穫はなかった。極少数の人間だけが成功し、マルコスも、ロバート・カーティスのおかげで成功者の中に入ったのだ。

カーティスは思い出す。「私は信じられなかった。私は財宝について信じられない理由があるんだ。」

GOLD WARRIORS
カーティスは世界の金算出量の一般常識的について、キルクスが言ったことに満足できなかった。カーティスは工夫と幸運しだいで再精錬されるのを待っている第二次世界大戦の財宝の大きな貯蔵所があると云う考え方に夢中になった。

カーティスは何をするかを決める前にもっと調べるべきだった。カー

ティスはキルクスに三日以内にマニラに飛ぶと告げた。

カーティスは一九七五年の二月の終わりにマニラに着き、キルクスに会い、ファビン・パー將軍等、マルコスの側近と仲間に紹介された。彼らは大変友好的だったのでパーを含んで彼らの半分がプロの殺し屋だとは気付かなかった。そのことは後ではつきりした。

「三日か四日で私は納得したよ。」とカーティスは我々に語った。カーティスはマニラに三日間滞在するつもりだったが、一カ月もどまつた。カーティスを納得させたのは圧倒的な物的証拠だった。カーティスはマニラのマラカニアン宮殿や他の場所でも、金の延べ棒でいっぱいになった部屋を見た。あるひとつの部屋のだけでも、金の延べ棒で六千万ドル分を見たと言ったのだ。銀行員として、冶金学者としてそれが本物だと理解した。

マルコスは礼儀正しいホストであろうと努力して、カーティスはマルコスの知性に感心した。後になって初めてカーティスはマルコスがまた大変「冷酷な男」だと気づいた。

最初の会合で、マルコスは、国際法では「第二次世界大戦の略奪財宝の発掘で、出自が特定できる物はすべて奪われた国に返却されるべきだ。」と定めている、この点で助けが必要なのと言った。

マルコスはカーティスに、自分は莫大な量の金を回収しており、その金が偽装しない限り没収されることになると言った。

一九七五年三月十一日から十二日に、マルコスはカーティスや他のゲストと掃海艇を改装した大統領専用クルーザーで夜のクルージングに

案内した。クルーザーは百人のゲストを乗せマニラ湾周辺をまわり、宴会が行われ、その後は踊りが続いた。

踊りは真夜中に終わり、ゲストは湾に面したところに降ろされた。そして、クルーザーはレバー・グループの中心メンバーと幾人かの外国のゲストだけを乗せて再びマニラ湾へ向かった。カーティスはオルフ・ジョンソン、ノーマン・キルストに混じって、戦争略奪品の回収に関する秘密の会談に参加した。「ニクソン元大統領の側近」と「フォード大統領の側近」がそこにいたことを覚えている。ニクソンは七ヶ月前に大統領を辞任し、後をフォードが継いだ。共和党はウォーターゲート事件のために一九七六年の大統領選挙に敗れそうだった。二人の側近が参加していることで、カーティスはニクソンとフォードがマルコスとの金回収活動に何とかして参加しようとしていると推測した。カーティスは、ふたりの側近が政府の代理人なのか、ニクソンとフォードを非公式に代表しているのかあれこれ考えた。

GOLD WARRIORS

カーティスとマルコスは星空のもとデッキチェアで多くの夜を過ごし、闇の金塊の問題について話し合った。マルコスは自分のことを自国民の生活向上のために、又冷戦時代のワシントン政府の良き協力者であるため誠実に取り組んでいる親米民主主義国家の大統領であると主張した。マルコスは自分の持つ悩み、つまり金塊を処分する難しさについて説明した。最良の方法は、他の金の銀行に金を売る危険に巻き込まれるより、むしろマルコスが自分の地金銀行を設立することだとカーティスは言った。自分の地金銀行があれば、金を保有することもデリヴァティブに貸し付けることも可能だし、大きな利益を得ることも出来るだろう。この提案はマルコスの興味を引かなかった。なぜなら、世界の新しいオッペンハイマーとしての華やかな自己イメージに合致

しなかったからだ。

カーティスはマルコスに金塊をアラブ諸国と石油と交換し、その石油を日本に売ってクリーン・マネーで決済させたことがあるか尋ねた。マルコスはこのアイデアが気に入ったようだ。

朝方、クルーザーはバタワン州マリヴェレスにある避暑用の大統領宮殿沖に停泊した。カーティス、ジョンソン、そしてキルストはマルコスの書齋に連れて行かれ、そこで本物のロクサスの仏像を見た。カーティスは近づき仏像が純金であることを確認した。仏像には刻み目や引っかけ傷があり首にはドリル穴がある、それでメッキした銅ではないことがはっきりした。マルコスはその首がどのように回して外れるかを見せた。オルフ・ジョンソンの助けがあっても、カーティスはひどく重い仏像を動かすことはできなかった。次にカーティスはバー將軍に地下の大きな部屋に連れて行かれ、何列にも並べられた金の延べ棒を十分に調べた。帰りにマルコスはテラスに立ち避暑用宮殿の前の丘を指差した。マルコスはカーティスに、あの丘に幅八〇フィート、長さがフットボール競技場くらいの地下倉庫をいくつかデザインして欲しいと言った。そうすればマルコスは二十万トから五十万トの金塊を貯蔵できることになる。マルコスはマニラで使用している貯蔵庫はすでにあふれ出んばかりだと語った。

再びカーティスはマルコスの述べる金の量に驚いた。その量は一般に存在すると考えられている精錬された金の量の何倍もの量だ。しかしカーティスは金は稀少だという俗説は、ダイヤモンドの俗説とおなじで、価格を高く維持するために希少だと言っていると確信できるに十分な金の量を見てしまった。

一九七五年三月二十五日、カーティスはオルフ・ジョンソン等と一緒にレバー・グルーブとの契約に署名をした。彼らは「前述の財宝を調査研究し回収するため、一緒に能力や手段を出し合うこと」に同意した。見返りは「フィリピンの国土と海域」で回収された金を分け前としてもらうことだった。

カーティスが関与したのは、ネヴァダの工場から二基の溶鉱炉を提供したことだった。溶鉱炉はマニラに運ばれた。一基はマラカニアン宮殿に隣接する国立開発コープに据え付けられ、そこでは溶鉱炉は金を適切な品質証明と品質番号をつけロンドン基準に改変（浄化）するために使われた。もう一基はバターン州のうなぎ工場の隣地にカーティスの仕様に合わせて建設された精錬所に据え付けられた。そこで事前に精錬された多量の鉱石や新しい鉱石が、カーティスが開発した、より効率的な抽出工程へ送り込まれた。この新工程での金の産出量の増加はフィリピン全体の金の産出量が増加しているもつともな説明になった。マルコス金のいくらかは、銀や他の金属を八百純度まで加えることで、精錬していない鉱山のインゴットに見えるように格下げされた。鉱山の金の延べ棒は登録も品質保証も必要ないのでその金は疑惑を起すことなく少しずつ市場に流された。

GOLD WARRIORS

カーティスが最初の旅でマニラにいる間、マルコスはオルフ・ジョンソンを試した。カーティスは、ジョンソンとカーティスを沿岸警備隊の哨戒用魚雷艇でマニラ湾のある場所に連れて行った。そこは日本軍の重巡洋艦「那智」が一九四四年一月五日に沈められた所で、ジョンソンが沈んでいる

「那智」を見つけれられるかどうかを確かめようとした。

「那智丸」については、そして「那智丸」がどのようにして、どこで最期を迎えたかについて様々な論議のあるところだ。

ひとつの見方として、「那智丸」は衝突で破損した後、日本での修理を必要とし、マニラ湾沿いのカピテ州で百の「金のユリ」金塊が積み込まれ、出航したとたんマニラ湾で待機していた日本軍の潜水艦に故意に魚雷で沈められたというものである。

海面に浮かび上がった乗組員たちは潜水艦の乗組員に機関銃で撃ち殺された。この説明では、「那智丸」は銀貨や金貨でいっぱいドラム缶を積んだ荷船を曳航しており東京へ向かっていたという。二番目の魚雷は荷船に命中し、真つ二つとなり砂と泥の海底に銀貨や金貨をぶちまけた。日本軍によって意図的に穴を開けられ沈められた他の財宝船のように、「那智丸」は浅い海域（約百フィート）に沈んだ。

公式の米国海軍の報告書には、「那智丸」は一九四四年十一月五日にマニラ湾に沈められたと断定しており、その沈没は連合軍の飛行機によるものだとしている。

ベン・バルモアに残された「金のユリ」の地図は沈められた船の位置と、積み込まれた財宝の種類を示していたが、マルコス配下のダイバーたちは濁った海水のなかで財宝を見つけることが出来なかった。だから、オルフ・ジョンソンは豊能力で財宝を見つけることを期待されていたのだった。

「那智丸」の位置を正確に突き止める努力に緊迫感が取り巻いた。なぜなら、日本のダイバーたちもまた財宝を探していたのだ。マルコスは以前、日本の難破船引き揚げ会社に許可を与えていたが、その時は日本人が「那智丸」の沈んだあたりに潜水するのを望まなかった。予

防手段として「ルソン荷役会社」を国営化した。この会社は日本のために仕事をしていることをマルコスは知っていた。バー將軍は沿岸警備隊の巡視船に日本人ダイバーたちのどんな動きも見逃すなと命令した。

日本政府は何が起こっているのかをあたかも知っているかのように、日本の首相はまさにこの時をマルコス公式訪問に選び、「那智丸」の親族の代表団と一緒に連れてきた。代表団の中には艦長の「コノオカ・エンペイ」大佐の未亡人も含まれていた。代表団は遺骨の回収を希望していると言い、首相は日本の引き揚げチームが「那智丸」から遺骨を探索する許可を要求し、またフィリピン海域に沈んだおよそ四百の日本船を探索する許可も要求した。マルコスは拒否した。

カーティス、ジョンソンと一緒に哨戒用魚雷艇に乗っていたのはベン・バルモアとポール・ギガ、加えてフィリピン人ダイバーの「グルーブ」とバーの警備係であった。ベンの地図に示された場所に錨を降ろし、ダイバーたちは濁った海水の中で数時間探索したが何ら得るものがない。ジョンソンはダイバーたちが諦めるまで忍耐強く待ち、それから右側に数百ヤード移動することを主張した。ダイバーたちは再び潜り、すぐ浮上し、ジョンソンに「那智丸」を発見したと叫んだ。そして、ダイバーたちは証拠に号鐘（船鐘）を運び上げ、浮きブイを沈没船の船首と船尾につないだ。

彼ら全員が翌日の午後その場所に戻ったとき、目印のブイは姿を消していた。

GOLD WARRIORS
海流が綱をちぎったようで、その日の内に船の場所を再確認するには遅すぎた。

三日目にジョンソンは再び「那智丸」の場所を特定し、新しいブイがしっかりと取り付けられ、バーは侵入者から守るために巡視船をその場に残した。しかし、三日後、彼らが実際に金の回収を始めるためにその場に戻った時、ブイはまたもやなくなっていた。

何か胡散臭い。カーティスはバーの直属の部下がブイを取り去ったのではないかとほのめかした。バーは、彼の指揮下の巡視船は大統領のクルーザーを護衛するためにその場所を離れなければならなかったと主張した。

実際のところ、カーティスは始めて本当のフェルディナンド・マルコスを理解しつつあった。「那智丸」がどこに沈んでいるか確実に知ってしまったら、マルコスは誰かと回収品を分け合う気持ちが無かつたのだらう。マルコスはカーティスとジョンソンに「那智丸」の事は忘れ、代わりにもっと見込みのある陸上の財宝隠匿場所に関心を向けるように言った。

マルコス一派のいくつかの情報筋によれば、マルコスは「那智丸」の金を回収したはずだと言う。レバー・グループの元駐米大使、アメリカ・ミュータックはカーティスに、マルコスが「那智丸」から回収した金は一九七五年時点で六十億ドルの価値があり、その当時金は一オンス六十五ドルで取引されていたと言った。この数字は別のマルコスサイドの情報筋から我々が確認したものだ。

三月の終わりにカーティスは緊急の用事にけりをつけ、自分の所有する精錬機器をフィリピンに発送しにネヴァダに飛んで帰った。彼は何かの地図を調べた後、マニラのサンティアゴ要塞ではすぐに金の回

収が出来、その後マニラのちようど東南にあたるテレサー2と呼ばれる大事な場所に取り掛かるうと決めていた。

ペンの「金のユリの地図」によれば、テレサー2地区はトンネルのひとつに乗り入れられた多くの日本陸軍のトラックの数を基本にし、また三体の大きな純金の仏像、裸のダイヤモンドが詰まったドラム缶を考えると、金の延べ棒で八十億ドル以上が埋められているはずだ。テレサー2は複合施設のほんの一部分にすぎない、ひとたび彼らがテレサー2に入れば、別の施設に入り込むことが出来る。

カーティスは土木工事の経歴を持つ数人の従業員をネヴァダに持っていた。カーティスは従業員をマニラへ連れて行き、財宝隠匿場所の開放を手伝わせようと計画していた。これは前もって給料、移動費そして海外での生活費など金のかかることだ。

カーティスは二基の六トン溶鉱炉をフィリピンまで運ぶ費用も支払わねばならなかった。カーティスはまた、ネヴァダで別の形で生み出していた事業収入も失うことになるだろう。

マルコスは全てのレバー・グループ仲間の経費支払いを拒否したので、カーティスは自分の懐から全ての費用を負担した。マルコスからみれば、カーティスは生涯のチャンスを与えてもらったのだから、全てを犠牲にする覚悟が必要であろうということだ。

今にして思えばカーティスは騙されていたのだが、彼は事が順調に進むことを望んだ。

カーティスは多額の資金を、彼の鉱山、スパークスの工場と設備に投資しており、その投資の邪魔をしたくはなかった。

GOLD WARRIORS
彼はフィリピンで地中から金の延べ棒を掘り出し始める費用を補うため、金策をする必要があった。この探索の冒険物語は異様だし秘密な

ので、間違っても銀行に打診することは出来なかった。そんなことから彼は「ジョン・バーチ協会」へ話を持ちかけることになった。

カーティスは、協会の側近グループが貴金屬の取引に深く関わっていることを知っていた。数年も前、協会の連中はカーティスに話を持ちかけていた。

「ハント・ブラザーズが一九七〇年代初め、世界の銀生産を独占しようとしていた時に」とカーティスは我々に話した。続けて「連中はハーバート・F・ブッフホルツ大佐を私のもとへ寄こしたのさ。ジェリー・アダムズ、ロバート・ウェルチもやって来たな。バーチ協会の創始者、下院議員のラリー・マクドナルド、そしてジェイやダン・アグニユー、フロイド・パクストンもやって来たんだ。」と話した。

バーチ協会は一九五八年、アメリカのいたるところに共産主義者、ユダヤ人、不法入国者、アフリカ系アメリカ人、自由主義者そして同性愛者が入り込んでいると確信する金持ちの実業家と極右政治家のグループにより活動を開始した。

会員たちはまた金と銀の虫をその印として与えられた。会員たちはFRB（連邦準備制度理事会）を創設したアメリカ大統領に対し、ずっと前から恨みを抱いた。FRBはアメリカで個人的が金を所有することを犯罪とみなし、その罪は多額の罰金、没収、投獄といった罰を伴うものだった。会員たちはニクソンがアメリカを二度も裏切ったと信じていた。一度は金本位制を廃止した時。二度目は共産中国を承認したことである。他方で、ニクソンの政策のおかげで、一九三三年以来、初めてアメリカ人は合法的に金を購入し、所有することが可能になった。だからこそ、バーチ協会の指導者たちは海外で金を手にいれ、カ

ナダの闇ルートから国内へ金を持ち込み、それを反共活動のために協会の基金に加えられた。

アメリカの超保守グループや、リベラル派にCIAや国防総省から追いつけられたランズデル將軍のようにバーチ協会員は自分たちの右翼自警団を作るための長期戦略を持っていた。それは決してヒトラーのブラウンシャツやゲシュタポのように無教養なものではなく、エリート民間軍隊に支持された私設FBIに近いものだ。これには資金が必要だ。民間に所有されている多量の金が必要だった。

カーティスは保守主義者で愛国者だったが、バーチ協会のメンバーではなかった。しかし貴金属に対する強い興味は共有していた。

カーティスがマルコスの金探索に参加したときバーチ協会の役員に対し、隠匿された日本軍の略奪品について自信を持って語った。彼はレバー・グループでの役割、マルコスと行う金の浄化と金を売りさばく販路探しへの関与について語った。

カーティスはバーチ協会幹部の幹部連中がすでにサンタ・ロマーナの金回収や、「ブラック・イーグル信託」を設立した時のロバート・B・アンダーソンとジョン・J・マックロイの役割を知っていることは気が付かなかった。

すでに彼らはM資金におけるマッカーサー將軍、ウィットニーと、ウイロビーの役割、そして戦後日本での金融操作の全てを知っていた。

GOLD WARRIORS
彼らがこれを知っていたのはバーチ協会の設立メンバーの一人にローレンス・バンカー大佐がいたからで、ユーモアの無い男、バンカーは日本でマッカーサーの個人的スタッフをボナー・フェラーズ將軍から引き継いだ。バンカーは一九四六年から一九五一年まで日本におけるマ

ッカーサーの主席補佐官であり、スポークスマンだった。一九四六年から一九五一年の間、日本ではアメリカで行われたマッカーサーのアカ狩りがかすんで見えるほどひどいアカ狩り（魔女狩り）が続いていた。

カーティスに融資を手配したバーチ協会の金庫番はワシントン州上院議員フロイド・パクストンと彼の息子のジェリーだった。彼らはピニール袋を閉じるプラスチック製のクリップを製造しているクウィック・ロック社を経営していた。

カーティスが言うには、もう一人の参画者はアトランタ州の上院議員ジェリー・アダムスで、彼はハント兄弟と提携している貴金属会社「グレート・アメリカ・シルバー社」の社長だった。カーティスが言うには、彼は下院議員のマクドナルドとロバート・ウエルチから、マルコスとの仕事をした時の融資は二人が個人的に「清算」してくれたと知らされたそうだ。

彼らはカーティスがバーチ協会の国民会議の一員である億万長者サミュエル・ジェイ・アグニューと直に取引することになっていと言った。彼らはカーティスにフィリピンでの費用として三件の貸付、合計三万五千ドルをすることに同意した。この貸付にはレバーの分け前22.2%という約束と、うなぎ飼育場の近くのパターン精錬所での10%の分け前以外に担保がなかった。

バーチ協会から財政的支援を取り付けたことで勇気づけられ、金を回収すれば数ヶ月で借金は容易に返済できると確信し、一九七五年四月半ば、カーティスはフィリピンへ戻った。カーティスはサンティアゴ要塞で容易に金を回収できるつもりだったので、大金持ちになるの

は数週間、数ヶ月そこらで十分だと思っていた。カーティスは相棒のジョン・マカルスターとその妻マーセラ、エンジニアのウエル・チャブマン、霊能者オルフ・ジョンソンを連れて行った。気前の良さを發揮して、カーティスは彼の相棒だけでなく、ジョンソンにもファーストクラスの航空券を購入したのだった。

その四月、マニラに再集結し、カーティスはサンティアゴ要塞の換気口からおばけ金庫の回収、つまり簡単な回収から始めたいとマルコスに言った。そうすればバーチ協会に金を返すことも出来るし、ネヴアダで工場の製造を開始することもできるだろう。

マルコスはカーティスがバーチ協会に金を返済することには何の関心もなかった。サンティアゴ要塞の作業がそんなに簡単なら、どうしてカーティスにやらせるだろう？

マルコスはフォート・サンティエゴは史跡なので特別許可が必要だと嘘をつき、マニラ市街の外側の地区を選ぶようカーティスに言った。

マルコスは再び避暑用のマリベラス宮殿裏にある二カ所の地下貯蔵所で作業するようカーティスに強く求めた。カーティスはその仕事をウエス・チャブマンに与えた、彼はそれぞれ幅八〇フィート奥行三百フィートのトンネルの設計図を描いた。そこを訪れた一人、常勤のCIA職員はどちらのトンネルも金を詰め込みながら建設されたと証言した。

GOLD WARRIORS
カーティスはサンティアゴ要塞で急ぎの回収が出来ないことに失望したが、テレサー2や、もうひとつの目標の作業に興奮していた。ピラクルシス大佐はベン・バルモレスとポール・ギガを引き連れ、四〇の財宝隠匿場所をカーティスに調査させた。毎晩カーティスはマニラ空港

近くの四つ星ホテル、フィリピン・ビレッジ・ホテルに戻った。そこでカーティスは最上階のペントハウスをジョン・マーセラ、マツカラスター、それにウエス・チャブマン、オルフ・ジョンソンらと一緒に使用した。

カーティスは探索場所を訪れていないときは、時間の多くをペントハウスで過ごした。地図を調べ、その重要部分を発見し、地図の暗号を解読しようとした。カーティスが特定の隠匿場所の調査を望めば必ずベンがバンバングまで長い距離を出かけ、望んだ地図を手に入れてマニラへ持ってきた。結局、ベンが旅をすることに嫌気がさし、彼がいつも持っている三枚の地図を除き、残った地図を全部カーティスに渡してしまった。

レバー・グループは当時カーティスと一緒に調査する多くの専門家を留意しており、日本人の言語の専門家も含まれていた。各地図にはひとつの時計の文字盤が描かれており、時には二個か三個の場合もあった。時計には時計の針がないものもあれば、四本の針があるものもあった。各時計の数字は時には普通の並びで、時には奇妙な配列もあり、時には逆さまになっていた。全ての場合に、時計の数字の間にある印はいつも違っていた。全ての地図はそれぞれが謎だった。

昼間は多くの実地調査があるために、カーティスには隠匿場所の地図にこだわる時間がますますなくなるし、地図を取り上げられないとの保証もなかった。そこで彼は百七十二枚の地図全てを写真に撮った。最初はポラロイド、次には三十五ミリのカラー写真で撮った。カーテ

イスは記録保存マニアだったので、書類、写真、録画テープの山を積み上げていた。彼は掃除婦がそれらの資料を処分しないかと心配だった。ある日、マルセラ・マツカラスターは買い物に出かけ、フィリピンの堅木から手彫りで作った三層式の回転式食器棚を買ってきた。カーティスは同じ店に出かけ、ネヴァダの妻に回転式食卓をひとつ送ることにした。カーティスは店員が搬送箱の中に古新聞を詰め込んで回転式食卓に詰め物をしているのを見た時、彼は店員に自分の事務書類で代用できないかを尋ねた。それが出来れば別の荷物を送る費用が節約できる。カーティスは急いでホテルへ帰り、書類、録音テープ、写真、ベンの地図を撮った写真の入った三つの箱を持って帰ってきた。それはとっさの決断だったが、カーティスの命とジョン・マツカラスターの命を救うことになるのだ。

翌日、カーティスはマルコスにテレサー2に取り掛かるよう勧めた。ベンの地図によれば、ここは777地区で、かなり期待できる場所だった。マルコスが派遣した陸軍チームはすでにテレサー1の発掘を試みて失敗していた。テレサー1とテレサー2はともに、テレサと呼ばれるヒスパニック地区にある陸軍基地のそばにある。テレサはマニラの南東、リサール州の活気のない地方都市である。

GOLD WARRIORS

ここにすり鉢山の形をした石灰岩質の丘を削って掘られた精巧なトンネル複合施設があり、トンネル内には数十億ドルの価値の金、プラチナ、ダイヤモンドそして三体の純金の仏像があった。テレサは一九四三年におよそ二千人のアメリカ人、オーストラリア人、ドイツ人、そしてフィリピン人の戦争捕虜により掘りおこされた。日本陸軍が既存の軍事基地を支配した時、全ての現地のフィリピン住民たちを立ち退

かせ、捕虜収容所が建設された。ちょうどテレサの外側に特別のすり鉢山が突き出ており、それは二百フィート以上突き出ているカルシウム・カルストだったのだ。この石灰岩はきめが細かくネズミ色の岩石で、フィリピン人はそれを切断してアドービ煉瓦と呼ぶ建築用煉瓦にしていた。なぜなら石は強固だが切断しやすく、支柱なし、コンクリート補強なしでトンネルを掘ることが可能だった。日本人技術者たちはすり鉢山とその下に、数層のトンネルを開発するためにひとつの計画を立てた。上の層は片方が水牛の角のように曲がったトンネルのある棒線画に似ている。左手の角はテレサー1であり、右手の角はテレサー2になる。他の層はその下にあった。建設中トンネルを換気するため、地図を見ると六本の通風縦坑が掘られたことが分かる。カーティスは入り口にするため、大きい通風坑のひとつを突き止めようとした。

戦争中、ここには六つの掘削チームがあり、違った開始場所から休みなく働かせた。男たちは腰布と捕虜札を身につけているだけで、薄いお粥の椀だけで生き長らえた。衰弱したり死んだ人間は交換させられた。強制労働をする人間には不足しなかった。

トンネル掘りが完了した時、六つのトンネルの内五つは各入り口から二十フィート内側で封印された。封印には陶土、細かい砂、碎石そしてセメントを特別に混ぜたものが使用された。本州北部の石川県（窯業で有名な地方）出身の将校が入口を封鎖する際にその管理をした。石川県の陶磁器が持つひとつの秘伝は、中国北部の土を使うことだった。中国北部の土は海砂、セメント、同地の碎石と混ぜ合わせると固まっても縮まないし、格別に堅牢なる。そして同地の石灰岩と混ぜ合

わせれば色をつけることも出来るので、そこが入口であることは見ても分からなくなる。この入り口の蓋を処理した後、入口に残った二十フィートの部分を土で埋め戻し、低木や竹そしてパイヤが植えられた。パイヤは早く成長するので、埋め戻し場所はすぐに近くの地形から区別が出来なくなった。

一方、日本陸軍のトラック集団がマニラ湾の倉庫からテレサ地区へ移動し、金塊、寶石の入った油のドラム缶、三体の金の仏像を運び出した。金の仏像はそれぞれ三フィート、八フィート、十三フィートの高さがあった。計画によれば、財宝はトンネル複合体のいろいろな場所に分散して貯蔵された。テレサー1とテレサー2には金の延べ棒を貯蔵する六つの場所があった。小さな金塊は、床部分にちょうどロジヤー・ロクサスが発見した穴のようなものを掘り、二箇所に収められた。他の場所には宝石やダイヤモンドが混在したドラム缶が収められた。何十日もかけて、金の入った金属製の箱はトンネルに運び込まれ、決められた場所に置かれた。すべてのこうした地域はその後、戦争捕虜によって枝編みカゴで運ばれた土で埋め戻された。

GOLD WARRIORS
次に小さいほうの二つの仏像はブルドーザーを使いトンネルのなかへ押し込まれた。各仏像は厚い鉄板の上の場所に押しやられ、片側に突出部が突き出ている千ポンド爆弾の上に載る形になった。引き金機構がセットされてしまえば、誰かが仏像に手をかければ、爆弾は爆発することになる。十三フィートの高さのある三つ目の仏像は大変重いでトンネルの中へ入れるため二台のブルドーザーが使われ、一台は仏像を引っ張り、もう一台が押しして中に入れたのだ。仏像が所定の位置に納まった時、仏像を引っ張ったブルドーザーは動けなかった。その

ため、日本軍はエンジンを取り外し、その場所に金の延べ棒の入った2つの箱を押し込み、燃料タンクを空にし、枠をはずした宝石をいっぱい詰めた。

この作業が終わった時、最後のトラックがテレサに到着した。これら二十三台のトラックは水牛の角に相当する残った場所にまっすぐ運転していった。タイヤは空気が抜け、車両は金の重みで下がり、車輪の軸（こしき）あたりまで沈み込んだ。神主が財宝を清めにやって来た。

全ての戦争捕虜たちはトラックの荷物を降ろすためと偽りトンネルに入るよう命令された。千二百人全ての戦争捕虜がトンネルに入った時、入り口にブルドーザーが土を押し込み始めた。戦争捕虜たちは自分たちが生き埋めにされるのだと分り、入口に向かってわめきながら殺到した。あらかじめ全ての入口に据え付けられた機関銃が彼らを撃ち殺した。前列にいた捕虜たちが射撃で死んでしまい、飢えと過労で半死半生の残りの捕虜たちには道をふさぐ死体を通り抜ける力も、ブルドーザーがすでに押し込んだ土の山を登りきる力も残っていなかった。捕虜たちはこのままでは生き埋めにされてしまうので、わめきたて土と死体の障害物を何とかしようともがいたにちがいない。

それから、この入口は特殊なセラミック・セメントで封印され、千ポンド爆弾と青酸カリの入ったガラスの小壘で偽装爆弾がかけられた。結局、日本軍はテレサー1の三本の通風縦抗とテレサー2の三本の通風縦抗を閉じた。それぞれのグループは、二つの換気口は直径がたったの二フィート、三つ目の換気口は直径八フィートだけで深いトンネルの換気を行った。小さな換気口は土と瓦礫と岩でいっぱい満した。

ハフイート幅の換気口は、土、岩、炭、竹、割れたガラスそして人骨で何層にも重ね一杯にした。人骨は殆どが頭蓋骨と腕の骨だった。(日本軍が処罰をする時は、他の捕虜全員がいる前でまず腕を切り落とし、次に頭を切り落としただのだ。)

赤表紙の財宝地図には主通風縦抗に詰めた物について細部にわたる正確な情報が含まれている。なぜなら、この情報は何時の日か財宝を回収しに日本から戻ってくるチームにとって、取り掛かる目印になるはずだからである。最後の仕上げは丘の上とその周辺に木を植えることだ、そうすれば村人たちがこの地へ戻ったときにその変化には気づかないだろう。

カーティスは、彼とベン・バルモアが財宝の回収の目印となる大きな通風縦抗のひとつを発見できそうだという虫の知らせがあった。カーティスはベンやポールと一緒にその場所を訪れると、地元の男たちが丘の頂上から石灰岩のブロックを採掘しているのに気づいた。彼は、陸軍が軍事施設のためにこの場所の土サンプルを採る予定だと言って彼らを追い払うようパー將軍に頼んだ。数人の無断居住者は掘り立て小屋から強制退去させられた。

カーティス、ベンそしてポールは、縦抗の中味が多少沈み込み円形のへこみが出来ているのですぐに通風縦抗を発見できた。マルコスは掘削のために、「エイジ・コンストラクション社」を設立し、通風縦抗の掘り下げを始めた。

GOLD WARRIORS

財宝地図が示していた通り、人骨、竹、割れたガラスと炭の層にぶち当たった。

三十一メートルの深さで陶磁セメントの仕切板にぶち当たり、彼らがその板をぶち壊すと全員がひどいにおいを嗅ぎ、嘔吐をし始めた。作業者は突然の痛みと発疹に襲われ入院が必要だった。ある者は、財宝と

共に生き埋めにされたおよそ千人の死体の腐敗から生ずるガスが広がっているのだと信じた。カーティスはそれがメタンガスか、通風坑が封印される前に放り込まれた小型容器に入った毒物だろうと考えた。元が何であれ、数日のうちに腐敗ガスに覆われた通風縦抗の入口は大きな醜い花、いわゆる死の花で囲まれてしまった。

通風坑の空気が入れ替わると三十六センチまで掘削作業が再開された。そこで掘削作業員は直径六十センチで、まん中に六インチの穴がある大きな丸い石を見つけた。それは石うすで、ベンの財宝地図に示された別の記号であり、彼の持つ地図の正当性を証明した。

5週間後、つまり一九七五年六月八日、掘削人たちはもうひとつの厚い磁器セメントの板を突き破り、金を積んだトラックのある貯蔵庫に入り込んだ。

オロフ・ジョンソンは貯蔵庫に入り、その光景を一目見て恐慌をきたし、半狂乱で転がり出た。ジョンソンはカーティスに、生き埋めにされた全ての男たちの魂を強く感じ、死者の指が自分を掴みかかろうとするのを感じると言った。その後、オロフは中に戻ろうとしなかった。

カーティス自身が降りていき、近親者に通知するために認識番号札を集め始めたが、パー將軍の部下はそれを戻すように要求した。

カーティスがジョンソンのような霊能者だったらその行為だけで、そしてジョン・パーチ協会から彼に押し付けられた突然の新しい要求を聞いただけで警戒しただろう。

突然、アグニュー家はローンに対する追加担保をカーティスに要求してきた。カーティスは電話でネバダにある重機の所有権をアグニュー家に差し出した。

カーティスは、マルコスのために取り組んでいる金の回収の内、二百億ドルまでの排他的権利をバーチ協会へ与える新しい契約書に署名することを余儀なくされた。

カーティスはバーチ協会からバハマのオフショア会社（税金回避地に設立された会社）を通して金の販売を行うつもりであると告げられた。その会社は「コモンウェルス・パッケージング」社と呼ばれ、クウィク・ロク所有の会社だった。マルコス所有の金は金取引の大規模な中心地であるナツソーで売買されるだろう。手続きはカナダ・ロイヤル銀行ナツソー支店で処理され、売上代金はバーチ協会の幹部メンバーに管理されている口座を使い、カナダのブリティッシュ・コロンビア州、バンクーバーの東にあるカナダ・ロイヤル銀行ケローナ支店の口座に入金される。そこで金はバーチ協会の中心となる金融専門家が管理する口座へ預けられ、その金を手に入れた金融専門家は、国境を越えて金を持ち込むのだ。バーチ協会はカーティスに、今までもこのようなやり方で多額の金を合衆国へ持ち込んだと自慢した。

カーティスは疑うべきだった。なぜなら、こうした新しい要求が出てくることはカーティスが知らないところで何かが起こっていることを示している。だが、彼はテレサー2にかかりつきりだった。

GOLD WARRIORS
金の回収は間近だった。かなり前から、カーティスはマルコスに警備体制に関する連絡書を送り、そしてテレサー2から回収された財宝をどのように運ぶべきかをマルコスに知らせていた。彼は、財宝がトンネルから回収された場合、カーティス、ヴィラクルシス、バーの副官、マリオ・ラチーカ大佐らの五人の男の立会いで明細書を記載するべきだと提案していた。そして、それから財宝は番号のついた箱に収められるべきだった。カーティスは、裸の宝石は国防部隊で保管したらど

うだと提案した。工芸品は流通していない外貨や全ての紙幣と一緒に保税倉庫へ送ることが出来る。

「重量のある品物である「金塊」は、金の「浄化」工場かその付近にうまく保存すれば、浄化工場を行ったり来たりする時の護衛部隊は必要でなくなるだろう。」

マルコスはカーティスに三体の仏像が回収された時には、仏像を切り刻んで再精錬するべきだろうと言った。そうでなければ、出所がばれてしまふに違いない。

一九七五年六月五日の朝四時に、カーティスはフィリピン・ヴィレツジ・ホテルのペントハウスでテレサー2の警備員からの電話で起こされた。

工事の現場監督は、掘削人夫がトラックのフェンダーと千ポンド爆弾の突出部を掘り当てたため、全ての掘削作業をストップしていると伝えた。

事前の同意により、爆弾にぶち当たった場合、カーティスは全ての作業者を移動させ、ジェモラ大佐に連絡し、彼に爆弾除去部隊がすぐに駆けつけるよう手配してもらおうことになっている。トラックのフェンダーが見つかったとのニュースに興奮し、カーティスとマツカラストーは陸軍基地へ車を飛ばし、ジェモラをたたき起こした。

ジョモラはバー將軍と連絡をとろうとしたが、連絡はつかなかった。彼らは一緒にケソン市まで車を飛ばしカーティスに知らせ、カーティスはバー將軍と電話で連絡をつけた。バー將軍はあとの事は全て任せ、カーティスとマツカラストーはホテルへ戻るようにカーティスに言った。バー將軍は後で彼らのところへ車を差し向けマルコス大統領と成功を

祝う会合を設定するだろう。

カーティスとマツカラスターがペントハウスに戻った時、オロフ・ジョンソンが詰め込んだバッグを持ちひどく心配そうに居間にいるのに気づいた。オロフ・ジョンソンは二人に自分たちは生死に関わる危険な中にいるので早々にフィリピンを立ち去るべきだと言った。オロフは大変優しい性格だが、自身に関して弱くも風変わりでもない。カーティスはオロフがそんなに動揺しているのを見たことがなかった。オロフが我々に話したような恐怖をあなたも実感できたら良かったのだ。

カーティスとマツカラスターはオロフを落ち着かせようと試み、自分たちはまさに大金持ちになろうとしているところだと言ってみたが、人の話を聞こうともしなかった。

オロフは近くの空港に出来るだけ早くたどり着きフィリピンから立ち去ろうとしていた。

カーティスはオロフに、フィリピンは戒厳令（軍政）が施行されているので、必要な出国許可を得る術はなく、その日のハワイ便に乗る術もないと教えた。オロフは思いとどまらなかった。彼はすぐに空港に向かって出発した。

「私は今でもオロフがその飛行機をどの様に手配したのかわからないね。」とカーティスは我々に言った。フライトは3時間も遅れていた。

GOLD WARRIORS
後でオロフにその遅れは霊能者の力で影響を与えたのかどうか尋ねたが、彼は微笑むだけだったよ。」

カーティスとマツカラスターはまだ意気は高揚していた。二人は金の延べ棒を積んだ二十三台の軍用トラックの中の1台のフェンダーを見つけたことを知った。二人はまさに大金持ちになるところだった。

「我々はみんなでマルコス大統領とマラカニアン宮殿でお祝いしようと考えていた。」とカーティスは言った。オロフが祝いの席に欠席するならそれは残念なことだと思った。

その日の午後、約束通り、一台の車がカーティスとマツカラスターを迎えに来た。車は二人をマラカニアン宮殿へ連れて行くのではなく、ボナファシオ要塞にあるアメリカ戦争墓地へ連れて行った。ラチャーカ大佐が二人を待つており、オリヴァス少佐と一緒にジープに乗っていた。ラチャーカは四五口径の自動銃を持ち、オリヴァスは三八口径のリボルバーを持っていた。ラチャーカはカーティスに車から降りるように命じ、シャクナゲの生えている一角へ連れて行った。オリヴァスはマツカラスターを別のシャクナゲの一角へ連れて行った。茂みのおかげで、ラチャーカはカーティスに下を見るよう合図した。そこには掘ったばかりの三フィートの深さの墓穴があった。カーティスはそれは自分の墓だと理解した。ラチャーカは自分の四五口径の銃をカーティスの右耳に押し付けて言った。「悪いな、ポプ。こうするように命じられたのだ。個人的なことじゃないからな。」

カーティスは早口にしゃべり始めた。「あんたが引き金を引くのをとめる事はできんだろ、だけど、もし撃つたら、次はあんたが穴の中で俺の隣に横たわることだ間違いないね。俺を殺せよ、そうすればマルコスは財宝地図を絶対手に入れることは出来なくなるさ。」

ラチーカはカーティスの言葉をこけおどしと思つたが、確信が持てなかつた。ラチーカはオリヴァスを呼びジーブまで戻り、バー將軍に無線連絡をした。ラチーカらが指示を待つ間に、バーは部下を派遣しカーティスの住むペントハウスと隣の会議室を家捜しさせた。そこはカーティスと彼の仲間が使つていたところだった。

マルセラ・マツカラストはそれを見守りながら恐怖に振るえていた。捜査係たちは全ての紙片、写真、図、巻きフィルムを没収した。その没収物は宮殿に運ばれ調べた結果、「赤の地図集」は含まれていなかった。その地図がないことがはっきりした時点で、マルコスとバー將軍に殺しを延期するように命じた。

墓地で、ラチーカは「マルコス大統領とバー將軍はお詫びのしるしに数日中にデイナーをしないと云つてゐる。とりあえず、二人をホテルへ送ることにする。」と言つた。

カーティスは簡潔に答えた。「そりゃよかった。」

その時までに、太陽は沈んでいた。ラチーカとオリヴァスはカーティスらをホテルで降ろした時に、ラチーカは「マルコス大統領とバー將軍は今回の出来事を非常にすまないと思つてゐる。すべてはひどい誤解だったのさ。」と言つた。

カーティスは後々まで、このひどい誤解がプリミティボ・ミハレスという名前の男と関わりがあつた事を知らなかつた。

GOLD WARRIORS
ミハレスは長年にわたつてイメルダ・マルコスの報道担当官だった。聡明な男、ミハレスはフィリピンで實際何が起つてゐるのか、あるいはマラカニアン宮殿の「黒い部屋」と呼ばれる警備室で行われてゐる拷問や殺害について、ほとんどの国民より多くを知つてゐた。彼は

結局うんざりし、反マルコス一派から実態を暴露するように説得された。

ロクサスと同じくミハレスは、勇氣ある行動のためにひどい報いを受けることになつた。

考えうる最高の舞台を求め、ミハレスはアメリカ合衆国に飛び、マルコス体制の聴聞会を開催してゐるアメリカ議会の委員会で証言するよう手配された。すでに、マルコスが行動を改めないなら、アメリカのフィリピンへの援助は大幅に削減されうるといふ強い指摘がされてゐた。ミハレスが議会で証言をすると外交的問題が勃発した。同じ時、一九七五年七月四日、五日、コラムニストのジャック・アンダーソンが、マルコスは日本軍の戦争略奪品探索を数人のアメリカ人の助けを借りて行つてゐるといふ情報を流した。

マルコスはロバート・カーティスがジャック・アンダーソンにこの情報を漏らしたと考え、テレサー2で財宝が発見された時点でカーティスとマツカラストを殺すことを決めた。

一九七五年七月五日の夜、ペントハウスで、カーティスはラチーカが言つたことだけは理解した。それは、ジャック・アンダーソンのコラムに対する情報漏洩はカーティスとマツカラストの責任だったという事である。

二人は間一髪で自分たちの頭を吹き飛ばされることから免れた。二人はやっとオロフの恐ろしい予感を理解した。マルコスが財宝地図さえ再び手に入れば、カーティスらを殺すことに躊躇するような輩ではないのだ。

実際のところ、地図はずつとペントハウスにおいてあつたのに、バ

「將軍の部下が家捜しで見つけられなかったことにカーティスは驚いた。

数週間前、テレサー2の仕事から解放され、カーティスは一七二枚の蠟引きした地図をどうするかという問題に直面していた。どの財宝地図も金で買えるものではなく、替えの効かないものだ。まだこの部屋を毎日掃除するメイドがいる。会議室を見回し、カーティスはホームバーの流しの下に配管工のパネルがついているのに気がついた。とっさの思いつきで、カーティスはパネルのネジを回し、外すと財宝地図が内側にきちんと入ることを発見した。その時から、彼は地図の原本は四六時中パネルの内側に保管し、関心のある地図だけを取り出していた。

今や、カーティスはアメリカ墓地で殺されかけた体験から、バー將軍が近いうちに自分たちの部屋をもっと徹底した搜索をするだろうと考えた。カーティスは地図の隠し場所から地図を取り出し、ジョン・マツカラスターに注意を促した。

「財宝の事は忘れようぜ。」とカーティスはマツカラスターに話した。

「命あつての物種だろ。」助かるための唯一の方法は、財宝地図を破棄することだとカーティスは言った。

マルコスとバー將軍が地図を見つけれない限り、彼らはカーティスが地図を隠していると考え、地図を失うような危険な事はしないはずだ。

WARRIORS

カーティスはマツカラスターに、地図は全ての細部もはっきり分かる写真に撮っており、すでにネヴァダに送っていると説明した。カーティスはその写真が回転式食卓と一緒に無事に到着していることを知っていた。そのため、原本の地図がもはや絶対に必要なわけではない。

マツカラスターは理解した。問題はどのようにして地図原本を破棄するかだろう

マツカラスターは地図を埋めようと提案した。カーティスは、我々は嚴重に見張られているので、地図の包みを持ってホテルから出ることも、シャベルを買うことも、地図を埋めるための目立たない場所を探すことも出来ない相談だと言った。いい方法はホテルの中で地図の廃棄処分をすることだった。地図はワックスでしっかりと上塗りしてあるので、びりびりにひき裂きトイレに流す事は出来ない。最良の解決策は地図を燃やすことだった。

会議室のバルコニーにはホテルの仕出し係がカクテルのつまみを焼くための小さなコンロが置いてあった。

朝の三時、カーティスとマツカラスターは会議室のバルコニーにベッドカバーを引っ張り出し、手すりに垂らして掛けた。掛けたベッドカバーのため、はるか下のホテルの庭の見張りからはバルコニーの様子が見えなくなった。コンロに火をつけて二人は一七二枚の地図を一枚ずつ燃やした。それには1時間以上もかかった。

ひとたび地図が廃棄処分した後、二人はフィリピンから脱出するために出国ビザが必要だった。出国ビザはバカマルコスからの直接の指示で発行されねばならなかった。

カーティスはネヴァダにいる信頼できる部下のジム・デュクロに暗号テレックスを送った。デュクロはカーティスが自分の会社の緊急役員会に出席しなければならぬと平文でテレックスするよう指示された。デュクロはまたカーティスの友人、ネヴァダ州知事D・N・オカラガンと連絡をとるように頼まれた。オカラガンは「ラス・ヴェガス・

サン」紙の取締役でもあったのだ。カーティスはホテルの電話は敢えて使わなかった。間違ひなく彼は盗聴されていたはずだ。

ネヴァダからカーティスのホテルに平文のテレックスが着くと、カーティスはラチャーカ大佐を邸宅に訪ね、テレックスのメッセージを読んで聞かせた。

カーティスはラチャーカに、マツカラストーはアメリカ墓地での出来事が原因でストレス性の心臓発作に苦しんでいるので、彼も治療のためアメリカに帰らなければならぬと訴えた。

バー將軍とマルコスには恐らくその話がわざとらしい言い訳だと理解していたが、二人は財宝地図をどの様に手に入れるかがわからないため追い込まれていた。

マルコスはジャック・アンダーソンのコラム事件でひどく危機感を募らせ、アメリカ議会が海外援助を削減するのではないか、あるいは事が収まるまで低姿勢でいたほうがよいかとひどく気をもんでいた。もしマルコスがカーティスとマツカラストーをアメリカまで後を追いかいと望めば簡単にそのように出来たし、簡単に殺し屋グループを送り込むことも出来たのだ。マルコスは時間を稼ぐことにして、バーに二人の出国を許可するよう命じた。

GOLD WARRIORS
カーティスとマツカラストーは直ちにホテルで出国許可証を受け取った。二人は次のユナイテッド航空便の予約を取った。二人は出国の便を待つ間に、バー將軍が自分たちのバッグに麻薬をしかけようとするかもしれないと心配し、小さな機内持ち込み用バッグ以外はずべて残すことにした。二人は空港で緊張から冷や汗をかきながら、警備員に逮捕されることも覚悟していた。

「我々はようやく飛行機に乗り込んだ」とカーティスは言った。「そして飛行機は滑走路をゆっくり進み、私はうまくいくと考え始めていた。その時、パイロットはスロツトルを緩め、これからゲートまで戻るとアナウンスした。我々はファースト・クラス席にいたんだ。私はマツカラストーにやっかいなことになるかもしれないとささやいた。本当にそうだったよ。ドアが開き制服姿の二人の大佐が機内に入ってきた。スチュワードスが私をキャビン・ドアまで呼んだ。私は行ったさ。担当の大佐は携帯無線機で誰かと話をしていて。大佐は私に、自分は私と機内持ち込みバッグを調べるよう命令されていると言うのだ。

私は彼らが私のバッグに麻薬や金、あるいは金塊のようなものを隠し持ち、密輸品を持ったまま出国しようとしたと主張するだろうと確信したね。私はきつい調子で彼を叱りとばし、俺はアメリカ人だ、アメリカの飛行機に乗っているんだ、空港の警備のチェックをすべて通過して来たんだぞと叫んだ。私は検査を受けることを拒否し、大きな声でこの仕打ちは国際的な違法行為だと叫んだ。大佐は無線通信機を取り出し、タガログ語で誰かと話した。相手が誰であれ、地位が上の人間だろう。大佐は英語で「サー」を連発してたからな。結局、永遠のように思った後で、大佐は、席についてもよいと言った。五分ほどして飛行機のドアは再び閉じられ、我々の乗った飛行機は滑走路を再び動き始めた。我々は助かったのさ、さしあたっては。」

ヴィラクルシスは地図の写真撮影や写真複製という予防策をまったく取っていなかった。カーティスが逃げた後、ヴィラクルシスは自分を守るために記憶に頼り十四枚の地図を描き、それを彼が別にとっておいた「赤表紙の地図」原本であるとうまくごまかした。マルコスはカ

カーティスに見せられた一枚の「赤表紙の地図」しか見てないので、その計略はまんまとうまくいった。マルコスはヴィラクルシスの描いた複製地図をマラカニアン宮殿の書斎にある金庫に保存した。マルコスが権力を剥奪された時、金庫の中でその複製地図は発見された。

カーティスは後日、バー将軍の部下の一人、オランダ・デュレイ大佐から、マルコスはテレサー2からの財宝回収を進めたが、埋っていた陸軍トラックから金塊を回収しただけだったとの情報を得た。マルコスはその後、主要な空気ダクトを閉じるように命じた。マルコスはダイヤモンドと裸の宝石の入った油のドラム缶を回収しなかったし、三体の純金の仏像も回収しようとしなかった。デュレイによれば、金塊はテレサーからサン・ファンの町にあるマルコス所有の自宅にトラックで運ばれ、金塊は検査のうえ在庫目録に記入して保管された。デュレイは、トラックの金塊は合計で二万二千トンだったと言うが、金塊保管を手伝ったマルコス・ファミリーの一人は二万トンだと言った。どちらにしても、金塊は一九七五年半ばの相場なら、わずか数百万ドルの誤差を含んでも八十億ドルの価値があるはずだ。「那智」から回収した金塊六十億ドルに、テレサー2から回収した八十億ドルの金塊を加えれば、ほんの六か月でマルコスは金塊、百四十億ドルを所有する大金持ちになっていた。それもこれもみんなオロフ・ジョンソン、ロバート・カーティスそしてベン・バルモアの働きのおかげだった。

その時、マルコスは、彼らに文句を言わせず、次の回収作業の協力を取り付ける必要があるのに、どうしてカーティス達にレバー・グループの分け前を払わなかったのだろうか？

GOLD WARRIORS
簡単に言うなら、マルコスは病的に貪欲で、金を払うくらいなら殺したほうがましだという輩なのだ。

アメリカで受けている新聞での悪評のため、マルコスは神経質になり、自分の不安を緩和するためには誰かを殺し、破滅させ、破産させなければならなかった。

カーティスはまだ生きていたが、彼の難儀は始まったばかりだった。彼の乗った飛行機がマニラ国際空港から離陸したとき、彼はやっと安全だと考えた。しかし、カーティスがネヴァダに着いた時、彼がテレサー2でトラックのフェンダーを見つめる以前からマルコスはすでに彼をだましていた事に気がついた。

カーティスは我々に次のように述べた。彼がテレサー2で回収作業をしている時に、「金カルテル」(GOLD CARTEL)がマルコスに「カーティスを殺し、金塊販売の仕事は「金カルテル」に任せる、さもないとマルコスはまずいことになるぞ」というマフィア的な申し入れを持って近づいていた。

カーティスは「金カルテル」という言葉を、世界の公的な金市場を支配している一流銀行、金加工会社、そして(連邦準備銀行やイングランド銀行を含む)国家財政部門の連合体と解釈していた。このときにカーティスが言っている事を証明する事は不可能だが、以下に述べる出来事で裏付けられるだろう。

カーティス所有の溶鉱炉とマニラでの金浄化の仕事はジョンソン・マセイ化学と呼ばれる金カルテルのメンバー会社に引き継がれた。ジョンソン・マセイ化学はイングランド「金地金銀行」の一つ、ジョンソン・マセイ銀行(JMB)傘下の会社だった。ロンドンのシティ(金融中心街)の仲買人が「マルコスのブラック・イーグル取引」と呼んだ多くのスキヤンダルが引き起こされた後で、ジョンソン・マセイ銀行は倒産しイングランド銀行に吸収された。

(訳者注。GOLD CARTEL 銀行とは、ロンドンにある五社のことで、モカッタ&ゴールドスミッド、シャーブス・ピクスリー、ジョン・マセイ、ロスチャイルド、サミエル・モンタギューのことである。その五社は世界の金相場を支配していると言う。)

マルコスはムータック大使をサン・フランシスコへ派遣し、カーティスに關係のある全ての破壊工作を始めた。カーティスは次のように言った。「ムータックは私の取引先の経営者や株主の全てに接触し、サン・フランシスコで会合を持ち、その場で私が戻って来ることはないと言った。ムータックは多額の現金を彼らに提供することで、私の会社を倒産させ、民事訴訟を起こすことを要請したのだ。経営者や株主の殆どはムータックの話にのり、マルコスが彼等を金持ちの大物にしてやった。・・・その結果として、私は民事訴訟、大陪審、告訴とひどい目に遭ってしまった。彼らは文字通り、米国にある私の工場を破壊した。ブルドーザーで壁を倒し、私の所有する設備の全てと貴金屬を盗み、私の銀行口座を空っぽにした。我々はトラック、ドリル、ブルドーザーなどの部品を所有していたが、それらは全て盗まれ、金庫には権利書が入っていたので、奴らはそれも売り飛ばした。我々は破産に追い込まれたんだ。・・・法廷での弁護費用もないし、事実、無一文だったから、マルコスや金カルテルに何の脅威もかんじなかっただろ。」

WARRIORS
ジョン・バーチ協会のジェイ・アグニューはカーティスを法廷に引張り出し、コモンウェルス・パツケージング社を通して貸し付けた金を回収しようとした。カーティスには返済は不可能だった。なぜならマルコスがジョン・バーチ協会の協力でカーティスを破産させていたからである。マルコス・ファミリーの情報筋によると、彼らがカーティスを訴える前に、バーチ協会員はすでにマルコスと取引をしており、

それはもともとカーティスを通して手に入れる予定だった二百億ドルの金塊を販売するためだった。

そんなわけでバーチ協会の理事会(取締役会)は前から狙っていた全てを手に入れたのだ。

我々が聞いたところでは、カーティスに対するアグニュー家の訴訟は、取引を決着させるためにマルコスが要求した報酬だったということだ。「あまりにもひどい状況に置かれると、逆に何も感じなくなるものだ。」とカーティスは言った。

以前はカーティスに関心を持たなかったFBIもカーティスの事件を調査するよう命じた。FBIはアグニュー家を謀略に加担したことで告発しようとはしなかった。謀略とはバハマで闇の金を販売したり、カナダ経由でアメリカへ売上金を密輸したことである。

その代わり、カーティスとマツカラストは、バーチ協会員より提供された証拠に基づいて、謀略の詳細を電報と電話で相談した罪で告発された。

彼らの裁判は一九七八年八月十四日に始まることになってしたが、カーティスもマツカラストも無一文だった。彼らは又、国選弁護人ではとても仕事が終わらないと思った。聴聞会でカーティスは事実と認め、執行猶予五年となった。

カーティスは反撃に転じて、自分の持つ情報と、全ての証拠(三百時間以上の録音された電話テープと、二千ページの書類)をアメリカ上院情報委員会の委員長であるネヴァダ州上院議員、ポール・ラクソルトに送った。ラクソルトの事務所は何も出来ないと言い、バーチ協会へ全ての資料のコピーを手渡した。数年後、カーティスはラクソルト

がマルコス大統領とホワイトハウスとの主要な橋渡し役の一人であり、マルコスの取り巻き連中の多くがネヴァアダ州にセカンドハウスを持つ理由のひとつだと知った。

カーティスには事を公表する以外に選択肢はなかった。彼は「ラス・ヴェガス・サン」紙の編集長ハンク・グリーンズパンとコラムニスト、ジャック・アンダーソンに連絡をとった。彼らは一九七八年四月に始めた連載で情報を発表した。

ステイブ・プシナキスというカリフォルニア在住のフィリピン人亡命者はその年の六月、「フィリピン・ニュース」紙で二十四回シリーズの記事を発表し、反マルコス派の抗議の火に油を注ぐことになった。マルコスは山下將軍の金塊話をヨタ話だと言って反論した。しかし、こうした記事でマルコスは、カーティスが「赤表紙の地図」を燃やしてしまったことと、カーティスだけがその地図のコピーを持っていることを知った。

仲介人を通して、カーティスは、レバー合意で彼に支払われるべき金を支払う事を条件に、マルコスに地図のコピーを返すことを提案した。マルコスは、一九八〇年の十月に回答し、カーティスにレバー回収事業での分け前全額分として、金塊で五十億ドルを送ることで全ての地図を買い戻そうと申し出た。

GOLD WARRIORS
金塊はマニラからネヴァアダ州のレノ空港へ直接空輸されるはずだった。ネヴァアダ州は州法により非関税の空港なので、金塊も他の輸入品も税金なしに運び込むことが出来る。

その年の十月、金塊を積んだ飛行機はマニラ空港から離陸した。太平洋の真中まで来たところで、マルコスは急に飛行機の進路をチューリ

ツヒに変更した。ワシントンでこの飛行を説明したフィリピン大使、トリニダード・アルコンセルによると、マルコスは将来の娘婿のグレゴリー・アラネタ、バー將軍、友人アドナン・カシヨギから、重大な過ちを冒す事になると警告を受けたのだった。もしマルコスが五十億ドルを払えば、カーティスが述べていた事がすべて真実だという証明が得られただろう。